

平成24、25年度 千葉県不登校児童生徒居場所づくり調査研究事業報告書 普及概要版

1 調査研究の概要

- ① **目的**：不登校児童生徒等の自主性や社会性の伸張を促し、学校生活の再開及び社会的自立を図るために、不登校児童生徒の個性・能力に応じた進路を見いだせるような、学校以外の居場所の在り方について調査研究を行うこと
- ② **実施主体**：特定非営利活動法人東京シューレ **実施場所**：さわやかちば県民プラザ2階の一室
居場所名称：東京シューレ柏の葉（通称：柏の葉シューレ）
ホームページ <http://www.shure.or.jp/kashiwanoha/> **活動ブログ** <http://yaplog.jp/nagareyama/>
活動日：火・水・木午前10時～午後5時（週3日基本）

平成24年度 総活動日数138日、平成25年度 総活動日数142日

対象：主として千葉県在住を中心に通所・所属を希望する6～23歳の不登校および不登校後の子ども・若者（年間を通じて随時募集）

在籍者数	小学生	中学生	中学卒業以上	合計
平成24年度	6	3	7	16
平成25年度	5	3	7	15

スタッフ体制：当団体の常勤1名、嘱託1名（不登校経験者の若者）の計2名を基本配置、活動に応じて加配。

2 調査研究の成果から見える6つのポイント！

ポイント その1 安心から自信へ(居場所プログラムの開発①)

- ① 子どもの“安心”はスタッフとの信頼関係から ☞ 子どもの気持ちをよく聞くことが信頼関係構築のスタート。定期的な個別面談で、悩み、希望、好きなこと、やりたいことを共感的にしっかり聞くことを大事にしました。
- ② “好きなこと”“やりたいこと”を体験・学習プログラムに ☞ 子どもの気持ち、希望、状況に合わせて子ども中心のプログラムをつくると、自信・主体性・意欲が高まりました。

【事例1】 M・Kさん（16歳）

小学2年より不登校。小学5年に入会するまで自宅で過ごした。学校や他者に強い不信感があり、入会当初はほとんど一人で過ごす。入会2年目くらいから個人面談でスタッフに悩みや考えを少しずつ話すようになると、ドラム講座やギター講座に参加するようになった。その後、ダンスや調理講座にも関心が広がり、映画制作にも取り組むようになった。中学卒業をきっかけに高卒認定試験に向け学習も始めている。

ポイント その2 ミーティングをベースにした居場所づくり(居場所プログラムの開発②)

- ① 週1回のミーティング ☞ 異年齢が同じスペースで共に育ち活動するための重要な仕組みです。自他の尊重、協同性、社会性、居場所への所属感・愛着が培われました。
- ② 体験・学習プログラムはミーティングでつくる ☞ 子どもは希望をミーティングで出し合い、お出かけ企画、フェスティバル、お泊まり会、夏合宿、料理・お菓子づくり・ドラム・ギター講座などに取り組み、主体的に動くようになりました。

ポイント その3 不登校を活かす(学校復帰・進学・進路プログラムの開発)

- ① 進路ミーティング ⇨ それぞれの不登校経験を語りあい、自己を肯定的に受けとめられるようにすることは、前向きに進路を考えるきっかけとなりました。
- ② ようこそ先輩 ⇨ 不登校経験者の実体験の話をするのは、学校復帰、高卒認定試験、通信制・単位制高校の活用、職場体験など、進路への具体的な取り組みにつながりました。

【事例2】M・Mさん(20歳・女)

中学2年生時にいじめにより不登校になり、同年より通所開始。当初は他人が怖く、女性スタッフが一对一で寄り添って過ごす。中3で私立中学校に転入し学校復帰するが柏の葉シューレにも並行して通う。中学卒業直後は進学せず、東京シューレ王子にも通う。自身のいじめられた経験を活かした映画づくりやイベントの実行委員を担うなど積極的になり、18歳になり通信制高校に入学し、現在も東京シューレを併用しながら学んでいる。

ポイント その4 保護者の理解が大事 孤立化を防ぎ、子どもの安定をひきだす

- ① 保護者会 ⇨ 悩みや不安を語りあって互いの経験から学び支えあうことが孤立化を防ぎ、子どもの安定につながりました。講演会やテーマ別保護者会も開催し理解を深めました。
- ② 保護者参加 ⇨ 居場所の運営をいっしょに考え、環境整備や活動支援などのボランティア協力を得ました。居場所づくりへの親の参画と応援は、子どもに安心と自信をよもたらしました。



進路の話を聞く



保護者学習会

ポイント その5 「子ども・保護者との連絡が難しい…」、「卒業で支援が途切れてしまう…」などに効果的

- ① 第3の居場所 ⇨ 保護者や子どもが学校に不信感が強く、連絡が取りにくいなどの場合、居場所が間に入って子どもの様子を伝えたり、意思疎通・関係改善の橋渡しをするなどの点で効果的でした。
- ② 長期支援ができる ⇨ 進級・卒業、義務教育修了等に伴って“支援の途切れ”が起こらない利点がありました。

【事例3】S・Hさん(12歳・男)

小学6年の9月から学校での友人関係のトラブルがきっかけで不登校。柏の葉シューレ通所開始にあたり、スタッフが在籍校の校長・担任と面談の機会を持った。情報の共有、居場所への通所日数や活動の様子の報告の仕方などの共有を図り、親子が安心して過ごせる環境を連携してつくることができた。

ポイント その6 協働による情報共有・経験交流が有意義

- ① 報告書・出席扱い ⇨ 居場所から子どもの在籍学校への「報告書」提出、校長・担任・SCの来所、通所日の出席扱いなど、連携の仕方と情報共有が進みました。
- ② 運営会議・ケース会議 ⇨ 行政とNPO法人が連携を深めることができ、事業の効果的な広報もできました。